

人類にとって定住化とは何か —2014年国際人類学民族学科学連合中間会議の成果から

文・写真
池谷和信

共同研究 ● 熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究
—アジア・アフリカ・南アメリカの比較から (2012-2014)

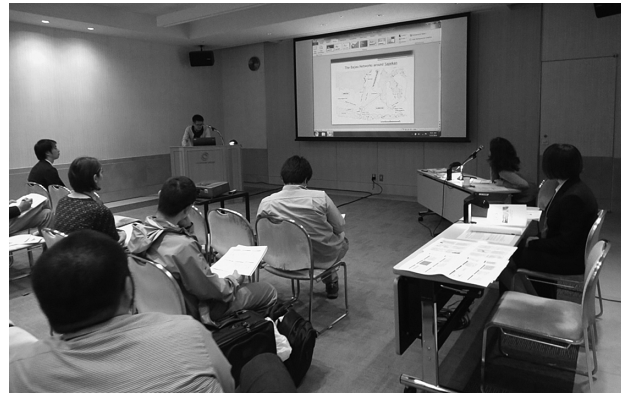
最先端の研究報告の場

熱帯に暮らす狩猟採集民の環境史研究のなかで、人類の定住化という事象を無視することはできない。これまでの研究では、先史時代における熱帯の狩猟採集民は遊動民（ノマド）であったことが広く知られている（池谷 2014）。これは、中緯度や高緯度の狩猟民にも当てはまることである。また、西アジアのような中緯度に暮らす狩猟民が定住化した後に、農耕や牧畜を開始したといわれる。これは、人類の歴史のなかでは「農業革命」といわれ、その後の人類の社会に影響を与えてきた。

さて、2014年国際人類学民族学科学連合中間会議（IUAES Inter-Congress 2014）が、2014年5月15日から5月18日までの4日間にわたって、千葉県千葉市幕張で開催された。中間会議は、5年に1度、開催される本大会のあいだに行われるもので、今回は千人以上が参加した。発表には、「狩猟採集民の移動と社会性」「牧畜民と開発」「狩猟、動物福祉、野生動物に対する防御」「災害とともに生きる」など、人類史の再構築のためには欠かせないパネルが数多くみられたが、ここでは、筆者が組織したパネル「遊動民の定住化と集住化」（Sedentarization and Concentration among Nomadic Peoples）の内容を紹介する。このパネルは、本共同研究のサブテーマの1つであり、5名のメンバーが発表し、他のメンバーも討論に参加した。また、これは、会議（IUAES）のなかで20年以上継続している遊動民研究グループ（Commission of Nomadic Peoples）の活動としても行われた。なお1997年の米国・ウィリアムスバーグ、2003年のイタリア・フィレンツェで開催されたIUAES本大会でも、このグループのパネルは行われ、筆者も参加した。その内容に関しては別稿（池谷

パネル「遊動民の定住化と集住化」における報告タイトル（報告者名、所属）

1	遊動民の遊動と定住の人類史（池谷和信 民博）
2	先史時代の温帯・熱帯における定住化と農耕への移行（那須浩郎 総合研究大学院大学）
3	東南アジアのウォールス海における海のクレオールとしてのバジャウとその生態・社会学的文脈（長津一史 東洋大学）
4	フランスのジプシーの遊動の減少および再構築：遊動と定住の二分法を超えて（野呂亮子 日本学術振興会特別研究員PD）
5	フィリピンのアエタにおけるモビリティと定住（テッサ・ミンター、オランダライデン大学）
6	マレー半島の狩猟採集民のなかの定住と技術（河合文 千葉大学）
7	マレー半島のオラン・アスリのなかの定住化と人口成長（小谷真吾 千葉大学）
8	移動焼畑農耕民の定住化の過程と影響：エチオピアの低地のマジャンギルの事例（佐藤廉也 九州大学）
9	狩猟採集民ではない、非狩猟採集民ではない：オマヘケ・ジューツワシの事例（ヴェリナ・ニコバ、ノルウェー トロムソ大学）
10	森林なしで生きること：オラン・リンバの定住生活での適応（アディ・プラセティージョ、インドネシア ICSD）
11	狩猟採集民の社会性と定住化：北タイのムラブリの事例（二文字屋脩 首都大学東京）
12	定住化と遊動：サラワクの狩猟採集民の政治生態学（金澤謙太郎 信州大学）



会場での報告のようす（2014年5月15日、幕張メッセ）。

1999; 2004) で報告している。

多様な定住化過程

筆者は、人類史の視点から広く遊動民の定住化に関心を持ってきた。しかも、遊動から定住へは一方的に進行するのではなく、定住社会が崩壊して遊動へ移行する形も存在することをフィールドでかいまみる機会があった。たとえば、東日本大震災は定住社会の崩壊から遊動への移行をもたらしたが、移行についてもまた、人類史のなかで位置づけて未来を考えることが必要になる。

今回、筆者が代表をつとめたパネルでは12本の研究報告がなされた（そのタイトルや対象地域については、下の表・地図を参照）。大きくは、①遊動民研究の視点、②モビリティ・人口・定住性、③経済・政策・文化アイデンティティの3つのテーマに分かれる。

①では、まず筆者が、遊動民の概念や定住化研究に関する動向を整理したあとに、生態的、歴史的、政治的の3つの観



●：パネル「遊動民の定住化と集住化」で取り上げられた調査地

点から研究の枠組みを示した。つづいて那須は、世界考古学の視点から狩猟民のみならず農耕民や遊牧民の定住化の問題を扱った。先史時代の西アジア、日本の縄文時代、中央アメリカのマヤ文明の事例を、自らの発掘経験をもとに論じている点の特徴である。長津は、東南アジアの海域を事例にして、そこに暮らすバジャウという集団の形成の歴史に焦点を当てた。彼らは、海のノマドと呼ばれてきたが、現在、大部分の人々が定住化をしており、彼らの表象のされ方と彼らの実践との違いに興味深かった。野呂は、フランスのマヌーシュ(ジブシー)を取り上げて、全体的には定住化が進行するなか、国の政策との関わりによって新たな移動システムが生じ、季節遊動が依然として残っている現状を報告した。

②では、アジア・アフリカにおける熱帯地域の定住化過程とその要因が報告された。ミンターが、ルソン島北東部に暮らす狩猟民アエタの移動と定住の実態について報告した。それらは、季節や地域によって異なるものである。とくに学校教育を含めた開発政策と定住との関わりが詳細に論じられた。河合および小谷は、ともにマレー半島の中央部に暮らすオラン・アスリの集団を対象とした。前者は定住化と技術的な多様性、後者は定住化と人口増加というテーマを取り上げている。そして、佐藤はエチオピアの低地の焼畑農耕民の定住化過程の事例を紹介しながら、狩猟民とは異なる移動要因として、呪術の重要性を指摘した。

③で紹介された事例は、ナミビアのサン(ニンコバ)、インドネシアのオラン・リンバ(アディ)、タイのムラブリ(ニ文字屋)、マレーシア・サラワクのブナン(金澤)のように、すべて狩猟採集民である。サンは、現代のナミビアの諸民族のなかではマイノリティといわれる。彼らは、現在、農場に暮らしており、定住化の歴史は長いが、遊動民としての彼らの意識が維持されている点が言及された。オラン・リンバもまた、インドネシア政府が国立公園を指定したことによって、公園外へ移動させられて定住化にいたり、同時に近隣民族との婚姻によっても定住化が進んだ状況が示された。タイやマレーシアなどに居住するムラブリやブナンにも、定住化の傾向に共通性がみられた。

定住化と社会変化

上述した3つのテーマは、問題意識こそ少し異なる部分もあるが、主として熱帯に暮らす「狩猟採集民にとって定住化とは何か」について、考えさせてくれる。まず、定住化前の遊動の形態と要因に関する問題である。遊動といっても本拠地の有無など多様である。人は、どうして遊動するのだろうか。自然資源の不足、獣害、病気、社会的な圧力、旱魃、戦争などの諸要因の関わり方も異なっている。

一方で、定住化によって何が変わったのであろうか。それについては、集落パターン、人口、なりわい、社会など様々な側面から検討された。例えば、アフリカのカラハリ砂漠の事例では、資源不足や社会圧など諸要因が複雑に関わって遊動が維持されていたが、国家の政策によって定住化が容易に進行して社会変化が生じた(池谷2002)。

定住化を歴史的にみると、①先史時代の遊動狩猟民の定住化、②農耕や牧畜の導入にともなう定住化、③近現代における政策による定住化や集住化などにまとめられる。これら3つの定住化は人口規模や社会組織などが異なることから、その社会的意味は同じではない。今回の会議では、各地域の民族誌の内容を比較することを中心課題としていたため、人類の定住化による集落変化、生業変化、そして社会変化については十分な考察にいたらなかった。今後は人類史という時間軸のなかで狩猟採集民における遊動と定住の歴史を位置づけていく作業が、将来のノマドの行く末をみるうえで不可欠になるであろう。

日本の研究者による国際的な発信が求められるなかで、日本の会場でこのパネルを企画した意味は大きいと考えている。会場には、人の移動を含めたモンゴル遊牧民を研究する英国の研究者もいて、積極的な発言をしてくれた。遊動のみならず、移動も含めた人類史は、狩猟採集民のみならず遊牧民、焼畑農耕民、商業民、そして、日本の震災後の三陸海岸の町のような定住社会など、すべての生活様式を視野に入れて構築する必要があると考えている。



定住化したオラン・リンバ(左:定住前 2013年3月、右:定住後 2014年1月)。

【参考文献】

- 池谷和信 1999「第14回 国際人類学・民族学会議に出席して—ノマディック・ピープルのコミッションの活動から」『民博通信』85:141-152。
- 2002『国家のなかでの狩猟採集民—カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』国立民族学博物館研究叢書[4]。
- 2004『牧畜民研究の新たな展開を求めて 第15回国際人類学・民族学会議』『民博通信』105:22-23。
- 2014『ノマド』国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.324-325丸善出版。

いけや かずのぶ

国立民族学博物館民族文化研究部教授。人類学・地理学専攻。アフリカを中心に、日本を含むアジア、シベリア(チュコトカ)、アマゾンの狩猟採集文化について研究をしてきた。おもな著書に『人間にとってスイカとは何か』(単著 臨川書店 2014年)、『地球環境史からの問い—人と自然の共生とは何か』(編著 岩波書店 2009年)、などがある。